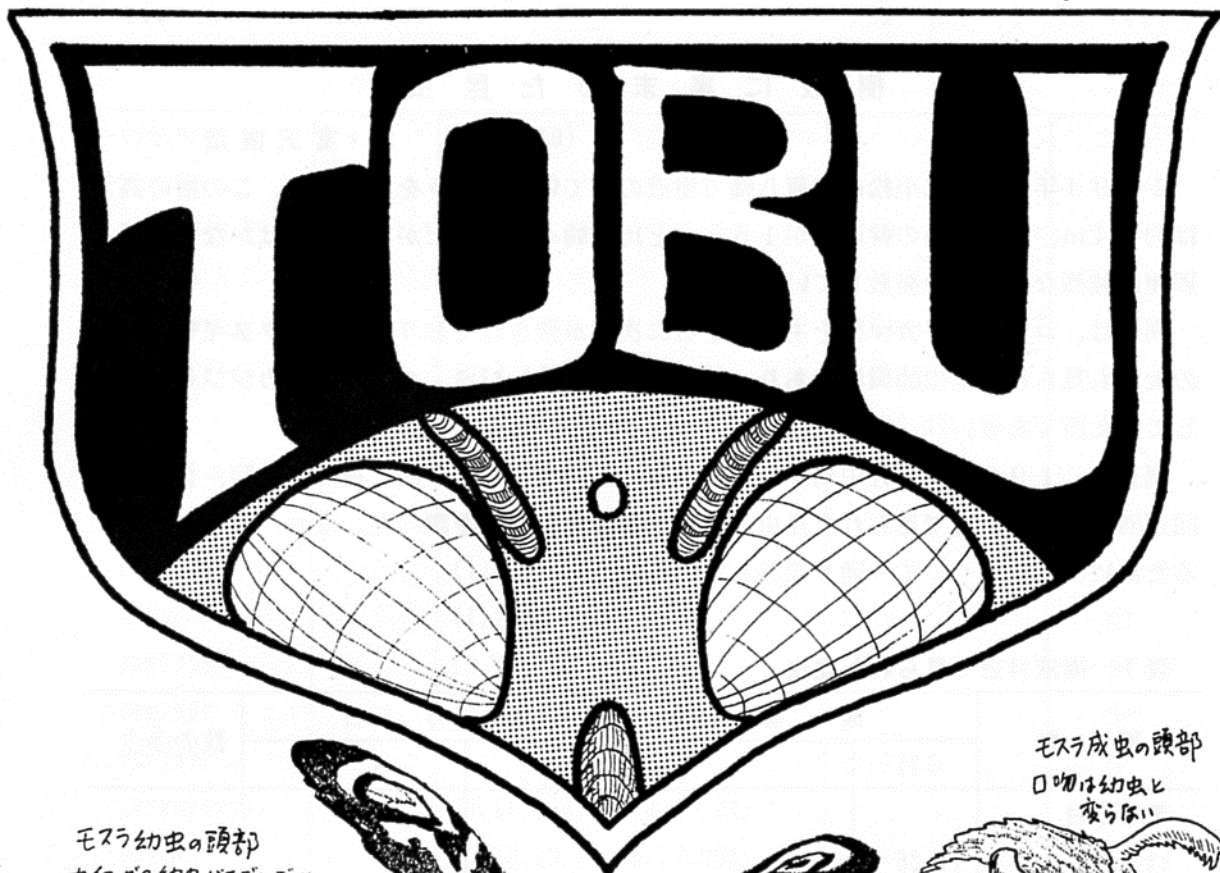




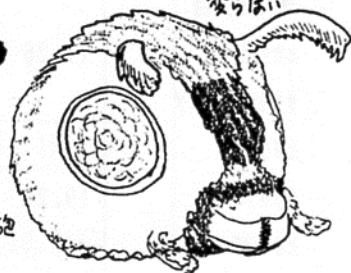
モスラ幼虫の頭部
カイワガの幼虫がモデルだが
胸部の模様は部分に目。
頭部の部分は太アゴに
デザインされている



「モスラ」(81)では
東京タワーで虫卵化。
ロリシカ国の屋敷類線砲
で火がついたが、
無事羽化した。
「ゴジラvsモスラ」(93)
では、国会議事堂で
羽化。天敵が
いないためか、
目立ち過ぎて虫卵化
する傾向にある



モスラ成虫の頭部
口吻は幼虫と
変わらない



モスラの悪玉バージョン(?)の
バトラの幼虫

小笠原基地から
離陸したF15-J
と空戦した際の
ミサイル攻撃も
ものともせず
日本海から上陸



インファント島の誕生シーン
まるで鳥の卵

樹液に集まった昆虫

富沢 章・富沢直浩

1994年の6月に小松市加賀八幡で樹液の出ているコナラを見つけた。この樹の高さは約14m、地上1mの幹直径が15cmと比較的小さい樹だが、樹液量はかなり多く、周囲に強烈なおいを発散していた。

周辺は、コナラ、アカマツを主体とする二次林が残されており、所々にクヌギやコナラの大木も見られる里山的環境であり、かつてはミドリシジミ、ウラナミアカシジミが豊産していた所である。

調査は、1994年6月中旬から8月中旬にかけて昼に16回、夜に23回、合計39回巡回し、樹液付近で見られた昆虫の種類と個体数の多少を調べた。なお、種類を確認するために、各種について一通り採集している。

表1 樹液付近で見られた昆虫

種 類	観 察 さ れ た 月 日			数の多少
	6 月	7 月	8 月	
チョウ目				
ヒカゲチョウ	11, 26			少
サトキマダラヒカゲ			13	少
ヒメジャノメ		23		少
ルリタテハ	19, 26	7, 9, 10, 20	13, 19	中
ヒオドシチョウ			11, 19, 26	中
アカタテハ	26			少
キタテハ		23		少
コムラサキ	26	13, 20	18, 19	中
ナシケンモン		(2, 19, 21)		少
クロモクメヨトウ		(7, 8, 12)		少
シマカラスヨトウ		(13, 21, 23, 29)	(1)	中
オオウスツマカラスヨトウ		(7, 10)		少
シロスジアオヨトウ		(8, 9, 15)	(1)	少
オニベニシタバ		(7)		少
シロシタバ			(1)	少
キシタバ		(8, 23)	(1)	少

表紙デザイン：小 幡 英 典

マメキシタバ		(1, 13, 19)		中
コシロシタバ		(2, 9, 12)		少
フクラスズメ		(1, 4, 12, 21)	(13)	中
カギバトモエ		(19)		少
ウスヅマクチバ		(7, 10, 29)	(16)	少
ニセウンモンクチバ		(7, 8, 14, 15, 16, 23, 27)	(1, 13, 19)	多
オオトモエ		(23, 29)	(1, 13, 16, 19)	多
コウチュウ目				
カブトムシ		(2, 16)		少
ヒラタクワガタ		(1)		少
コクワガタ		(1, 15)		少
ノコギリクワガタ		(3, 8)		少
ミヤマクワガタ		(27)		少
マイマイカブリ			(1, 13)	少
アキタクロナガオサムシ		20, (1, 3, 8, 12, 14, 15, 21)		中
キマワリ		10, (8, 10, 12, 16, 27, 29)		中
オオクチキムシ		(22)		少
ヨツボシケシキスイ	26	7, 9, 10, 13, 20, 23, (1, 2, 3, 7, 8, 12, 14, 19, 21)		多
ヨツボシオオキスイ	11			少
カナブン	26	9, 10, 13, 23, 29, (3, 13, 14)	13, 19, (16)	多
シロテンハナムグリ		13, 23	(13)	中
ナガゴマフカミキリ		(2, 3, 10)		少
オオゾウムシ		(7, 16)		中
ハチ目				
モンズズメバチ			13, (19)	少
スズメバチ		23	13, 19	中
ゴキブリ目				
ヤマトゴキブリ		(8, 10)		少
バッタ目				
マダラカマドウマ			(1, 19)	少

注1. 観察された月日のうち () に囲まれていないのは昼、() 内は夜に確認したことを示す。

注2. 数の多少は、調査期間を通じて観察された個体数が5頭以下を少、6～21頭を中、21頭以上を多とした。

表1のうち、樹液の吸汁を確認できなかったのはナガゴマフカミキリだけである。また、表には示さなかったが、未同定のハエ類2種、アブ類1種、アリ類2種、アメンボ類1種が吸汁していた。従って吸汁の確認できたのは47種であった。

チョウ目の蛾類は15種確認できたが、すべて夜間であり、ヤガ科で占められる。春の糖蜜採集においても誘引されるのはヤガ科がほとんどであるのと同様である。コウチュウ目は15種のうち、カナブン、シロテンハナムグリ、ヨツボシオオキスイを除けば、夜間に優先的に活動しているようだが、ヨツボシケシキスイは昼夜を問わず、樹液近くの樹皮の割れ目に見られた。

《とみさわ あきら 〒923 小松市大川町3-71》

《とみさわ なおひろ 〒923 小松市大川町3-71》

石川県産ツマグロキチョウを採集

松井 正人

捜し求めていた県産のツマグロキチョウをついに採集することができた。遡ること16年前、蝶談会結成時、当時会員だった入場 登氏からツマグロキチョウ採集の情報をうかがい、これまた当時の会員だった松本和馬氏と、勇んで加賀市へ採集に出かけたものの、求めるものは採集できなかった。それからというもの、入場 登氏からは時々情報をいただいていたが、なぜかツマグロキチョウには縁が無かった。

1994年再び、入場 登氏からツマグロキチョウ採集の情報が入り、その標本までいただいた。今年こそはとの思いを抱いている横で、ふらちな事を言う奴がいた。「松井さん採った事ないんですか。専門にやっている人が採れない虫を採るのって、なんか楽しくてゾクゾクするじゃないですか」などと、挑戦状を差し向けてきた。

この一言で闘志が燃え上がり、第3者の見守る中、ついに1雌を採集することができた。思えば苦節16年、あっけない幕切れだった。

独りでコツコツ採集活動する人もいよう、けれど数人の仲間がいると実績は数倍にも跳ね上がるものだ。今回の採集も、挑戦者と傍観者がいなければ、はたして採集できたろうか。

最後になりましたが、常々教をいただいている入場 登氏にお礼申し上げる。

《ツマグロキチョウ》

1994年10月 8日	羽咋市国立青年の家	1♂	入場 登
1994年10月23日	加賀市片野	1♀	松井正人

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

ミヤマチャバネセセリの蛹化場所

松 井 正 人

海岸で、ミヤマチャバネセセリの蛹を捜したことがある。老熟幼虫はたくさんみつけるのに、蛹はぜんぜん見つからなかった。そこで、越冬蛹になる老熟幼虫を鉢植の食草に付け、ネットを被せて様子を見た。すると、葉を船型にして葉裏で蛹化したもの1頭（5%）、ネットで蛹化したもの14頭（70%）、食草の株の中で水戸納豆のように蛹化したもの5頭（25%）だった。地表からの高さは最高が20cmで、10cm以下が16頭（80%）だった。ネットで蛹化したものは、食草から離れて蛹化しようとしたものと思われる、これでは食草で蛹を探しても見つからないと思った。

1994年の夏は雨が降らず異常に暑かった。ましてや海岸の日当たりともなるとめまいがするほどで、チガヤやススキの葉は乾燥で丸まっていた。そんな中、9月2日は暑さを避け、6時頃に早朝観察をしていたところ、チガヤの上に1頭のミヤマチャバネセセリが止まっていた。羽化したてのようで、チョウの足元には蛹殻があり、中には液体が残っていた。この蛹は地上1m程にあり、葉を船型に曲げ葉表で蛹化していた。そう言えば、この海岸産を春から夏にかけて飼育した時は、葉を船型にして葉裏で蛹化したものが何頭もいた。ネットを被せずに飼育したので、いなくなった幼虫もいたが、残った50%程はチガヤで船型蛹化をし、年内に羽化した。もしネットを被せていれば、いなくなった幼虫はネットで蛹化していただろう。

この地のミヤマチャバネセセリは、年内に羽化するかないかで蛹化場所を変えるようである。船型蛹化は羽化グループで約50%、越冬グループで5%。ネットでの蛹化は羽化グループで約50%、越冬グループで70%。水戸納豆型は羽化グループには見られず、越冬グループで25%だった。

ミヤマチャバネセセリの蛹化場所（%）

蛹 化 場 所	年内羽化蛹	越 冬 蛹
ネット(食草を離れる)	約50	70
葉 上(船 型)	約50	5
株 中(水戸納豆型)	—	25

※ 年内羽化蛹には、2化と3化が含まれる

この違いは、越冬時に食草が倒れるところにあるようだ。食草が倒れると、葉上での蛹化は危険になるし、ネットでの蛹化は、より安全な場所を捜し求めて食草を離れた結果と思われる。地表付近での蛹化はダメージを最小限にするだろうし、水戸納豆型はダメージが無いかも知れない。

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

地方的分布記録と同好会誌

徳 本 洋

《石川県にニイニゼミはいない?》

セミはもっともポピュラーな昆虫の一群であるが、その種数も少なく、石川県内にすむセミの大部分は、子供でもその正確な名を鳴声を聞いただけで当てることができる。ところが、あまりにもポピュラーなこの昆虫の、石川県内分布情報がきわめて乏しいことについて、私は本誌前号掲載の報文「石川県内セミ分布情報の過去、現在」で詳しくお話しした。どんなセミがいるか、ということは分かっているが、どのセミが、どこにいるか、あるいはいたか、という正確な記録を記した報告が、ほんとうに少ないのである。

環境庁は近年、いろいろな生物の分布情報を、高いメッシュ密度で調査することを始めている。昨1994年から5か年計画で始まった自然環境基礎調査でも、どういういきさつか知らないが、セミ科が日本産全種について、精密なメッシュ分布調査を行なう対象の一つになっている。ところが、石川県のセミについて、文献で分布情報を拾おうとすると、情けないほど記録がない。そこで、石川県内のセミについての正確な分布情報は、これから多くの人の力によって蓄積していかなねばならぬことになる。

このことは、何もセミに限ったことではない。昆虫だけについてみても、ある種について、その県内での分布情報が、高い情報密度で把握されているものはきわめて少ない。本会会誌に連載されている松井正人氏のチョウについての種ごとの分布情報の記録の総リストは、きわめて精緻であり、貴重なものである。しかし、チョウ以外ではその足元にでも寄れるレベルのものはないのでなかろうか。農業害虫などは、農事試験場に、それを担当する独立した課があるのだが、個々の種別に、その分布情報がどの程度に整理され、利用できる形になっているのか、不安がある。

《こまめに分布情報を記録せよ》

ところで環境庁の調査は、おそらく予算の関係であろうが、新規に分布調査を行なうというのではなく、文献に記録されているものを拾うという方法を原則としている。それで、セミに限らず、いろいろな生物について、できるだけ、こまめに分布記録をなにかの文献に記載しておかないと、データとして活用できないことにもなりかねない。また、過去5年以内の記録について報告せよ、というような形式も環境庁の調査ではよく使われる。どんどん自然環境が破壊されている現在、古い分布記録では現状把握に役立たない、というのであろう。そのためには同一種でも、時間系列的にこまめな分布記録をたえずおこなっておくことが必要である。

さらに、コンピュータで分布地点のプロット地図を作る関係から、分布地点のメッシュ・コードの報告が要求される。このような目的では、「分布地：金沢」というような

記録は使いようがない。だから今後はメッシュ・コードは分からなくても、できるだけ詳しい分布地点の記載が必要である。村なら字（あざ）の地名まで書くとか、何々山の東南斜面の標高何メートルとまで記録しておけば、メッシュ・コードを調べることが、かなり可能となる。

また、いわゆる「中央」で活躍している専門家、たとえばセミ情報を集めている人の目にとまらない文献に、石川県のセミ記録が記されていると、石川県にはセミがない？ ことになる場合もあることは、前記の別報にも記した。たとえば、日本セミの会会報に1989年から「日本産セミの分布調査報告」という膨大なレポートが連載されたが、これにはニイニイゼミもミンミンゼミも石川県からの記録は皆無である。ミンミンゼミの分布プロットは福井県では県内をぎっしり埋めているが、石川県はまっ白である。もちろん、だからといって、この報告の著者が石川県にニイニイゼミもミンミンゼミもいない、と考えているわけでないことは明らかである。ただ、場所をプロットできるような報告が、著者の目に触れる範囲になかったということである。石川むしの会の武藤（たけとう）明氏が報告した医王山のエゾゼミ、白山一ノ瀬近辺のアカエゾゼミなどは、ちゃんとプロットされているが、これは武藤氏がこれらの報告を「昆虫と自然」という全国誌に載せていたからである。

それから当然なことであるが、ある種の分布記録を昆虫のどの成育段階でおこなったか、ということも重要である。セミの成虫はかなり遠くまで飛んで移動する。ある場所で鳴いていたからといって、そこで発生したとは限らない。だからセミでは幼虫の脱け殻調査が重要な意味をもってくる。飛来地と発生地を区別することは、何もチョウばかりに必要なのではない。

そして、存在確認を採集標本でおこなったか、目撃記録か、鳴声記録かもはっきりデータに記しておかねばならない。そのいずれかによって、後日、検討課題を生ずる可能性があるかもしれないからである。

さらに蛇足的であるが、当然のこととして、種の同定の信頼性は欠くことができない。

以上のようなことから、過去の石川県内の分布記録には、折角、多大のエネルギーと費用を使ったものでありながら、今日、それを活用できないものがかなり多量にあるのは、まことに残念なことである。

《地方的同好会誌の役割》

私はここで、地方的文献に載せた報告は、意味がないといっているのではない。しかし、だからといって、小さな地方的文献まで全部克明に調べると、県外の人に要求することは酷である。地方的文献はこういう点では不利であるが、ただ、折角、地方的文献に載ったデータが存在する場合、それをできるだけ全国的に知らせる対策を、地方に住む者は心がける必要がある。また、前記したように、その地方の分布の詳細な記録がいくら大

切だといっても、中央誌に載せうるような内容のものは少なく、その地域の文献でないと記録できないものがほとんどであろう。そして、そこにこそ、地方的文献の重要性が存在する。だから、地方的同好会にとっては、その地方の生物の詳細な分布記録を作ること、今日の意義のある、もっとも重要な任務であると考えべきだし、同好会会誌は、そのためにフルに活用されるべきである。その意味で、同好会員は小さな分布情報でも、どんどん、こまめに会誌上に記録する習慣をつけねばならない。

また、普通種の記録も、今日ではきわめて重要で、普通種であるがためにほとんど記録が見当らず、分布図も作れないというケースが頻出する。先日、大阪で開かれたクモの会に出席したら、兵庫県のクモの分布を調べている人が、ジョロウグモの分布地点を文献からプロットしたら、7か所しかできなかったといっていた。ジョロウグモといえば、チョウでいえばアゲハチョウのような目立つ普通種で、こんな少ない分布地は、とても考えられないのだが、要するに誰も記録しないのである。そういう意味でアブラゼミもモンシロチョウも、分布記録が必要な重要対象であることを頭に置いてほしい。普通種であれば、その種の分布状態の地理的、量的な把握が精密にでき、その年次変化が見事に図表化され、環境変化の状況を万人に知らせうという可能性もある。

ただ、分布情報として全国的な見地から重要な新知見と考えられるようなデータは、やはり、全国誌とか、学会誌のような文献に発表すべきである。そういう重要情報を、会員数名のグループ誌に書いて、新発見を書いたと威張っても、それは喜劇であり、悲劇ですらある。

本会会員には動き回り、採集することの好きな方が多いが、採集するだけでなく、短報でよいから、できるだけ、こまめに会誌に投稿して下さることを期待したい。

《とくもと ひろし 〒921 金沢市泉野出町1-2-6》

「翔」最近号20冊に載った
報文144件を虫別に分けて
みると右図のようになる。

蝶関係の記事は多いものの
50%は占めていない。

トンボ

(2%)

その他

(21%)

セミ

(6%)

蝶(40%)

甲虫(31%)

キノコ周辺で得られた石川県初記録の甲虫その4

松井正人

キノコ周辺の甲虫を採り初めて、2シーズンが過ぎた。「その3」までに37種の初記録の甲虫を報告し、今回新たに8種を報告する。これらの報告ができるのも、全て高羽正治氏のご協力によるものだと思っている。氏の甚大なるご協力に、改めて深謝申し上げたい。

《ハネカクシ科》

クロモンハバヒロハネカクシ Megarathrus scriptus Sharp

1994年 6月11日 尾口村岩間ハライ谷 1頭 松井正人 採集

《タマキノコムシ科》

セモンマルタマキノコムシ Agathidium (Neoceble) derispioides Nakane

1994年 6月11日 尾口村岩間ハライ谷 1頭 松井正人 採集

オオヒメタマキノコムシ Pseudoliodes latus Portevin

1994年 7月10日 尾口村三村山 3頭 松井正人 採集

《デオキノコムシ科》

コカメノコデオキノコムシ Cyparium laevisternale Nakane

1994年 7月17日 白峰村白山釈迦林道 1頭 松井正人 採集

《ゴミムシダマシ科》

オオメキノコゴミムシダマシ Platydemus lynceum Lewis

1994年 8月31日 輪島市高洲山 3頭 松井正人 採集

《コメツキモドキ科》

ツブコメツキモドキ Atomarops lewisi Reitter

1994年 7月17日 白峰村白山釈迦林道 1頭 松井正人 採集

《ミジンムシ科》

テントウミジンムシ Corylophodes punctipennis Matthews

1994年 7月10日 白峰村大杉谷 1頭 松井正人 採集

《ナガクチキムシ科》

ヨツモンヒメナガクチキ Holostrophus dux Lewis

1994年 7月24日 白峰村砂御前山 1頭 松井正人 採集

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

ヒグラシを捕まえたオニヤンマ

松 井 正 人

7月9日の宝達山山頂には、おびたしい数のアカトンボが飛んでいた。ところが7月23日は入れ替わったようにオニヤンマがたくさん飛び、アカトンボが大きくなったような錯覚を覚えた。この日はヒグラシの集団合唱も始まったようで、耳がいたいくらいに鳴いていた。

そんな中、頭上で「ジッ」「ジッ」とヒグラシを捕まえたときに手の中で鳴いているような声がした。見上げるとオニヤンマが円を描き、ヒグラシを捕まえている。見えても止まらず、地上3m程で直径4m程の輪を描き続けている。オニヤンマの足は、ヒグラシを捕まえているのが精一杯なようすで、止まるための余裕が無いようだった。

1994年7月23日 押水町宝達山山頂にて

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

ダイミョウセセリの越冬幼虫を採集

松 井 正 人

エノキの根元でオオムラサキの越冬幼虫を捜していたところ、丸まったコナラの葉中からダイミョウセセリの老熟幼虫1頭を発見した。

1994年4月17日 吉野谷村下吉野 1頭（老熟幼虫） 松井正人 採集

コナラの枯葉は表を外側にしてU字状に丸まり、葉縁は糸で閉じられていた。発見時に枯葉を開いたので糸は外れたが、5時間程経って帰宅したときには再び糸で閉じられ、幼虫は糸をつけていた。様子をみていると、4日後の21日に蛹化した。

コナラの枯葉には、虫が食ったような穴が4つ開いていて、ちょうど蛹の顔付近にあるマッチ棒の頭がちょうど入るような穴は、中が見えない位に糸で完全に塞がれていた。顔の上方1cmくらいにあるごはん粒のような穴には太い2本の糸がかかり、2本の糸はお互いがひっぱられるような形で更に吐糸され、ごはん粒の穴は2つの丸い穴に分けられていた。そこからまた1cm上方にある、ごはん粒が2つくっついたようなハチの字状の穴は吐糸されていなかった。

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

モ ス ラ 雑 感

小 幡 英 典

銀幕を華々しく彩った昆虫型怪獣の代表格モスラは、脇役登場も含めて6度も映画化されているが、その生態には謎が多い。劇中に摂食シーンが無く、何を食べているのか触れられていないため、食物は不明である(注1)。成虫は、開長175m。飛翔能力に優れており(注2)、複眼、羽の模様(注3)、足の形状には、変異が見られる。幼虫は泳ぎがうまく、地中も自在に移動する。幼虫の体長は、最大180m(注4)。体節数は個体差(注5)があり、瓢箪型の繭を作って蛹化する。卵は、長径75m・短径45mの楕円形。

さて、この卵であるが、卵と云うにはかなり設定に無理があるように思われる。あくまで個人的意見だが、本当の卵はもっと小さいものが別があり、そこから孵化してある程度成長したモスラの幼虫が休眠に入るために作った繭が、この卵だと考えた方が良いのではないかと思う。理由は、以下のとおり。

- 1 殻の大きさが成虫の胴体よりも大きい。
- 2 中から出てくる幼虫が、殻の大きさに比べて小さい。(注6)
- 3 殻からでた幼虫の体長が、僅か1.33倍になるだけで蛹化してしまう。(注1)
- 4 小美人(注7)のテレパシーやインファント島島民の願い(注8)で、速やかに殻を破って出現する。

注1)「ゴジラvsモスラ(1993)」で海上でゴジラに襲われた時は全長90m、東京に出現した時は120mに育っていることから、何らかの食物を取っているものと思われる。

注2) 大気圏外も飛行可能。

注3) 羽の模様は、ヨロイチョウを参考にしたらしい。

注4)「モスラ(1961)」での設定は180m。40～150mと記述されている時もある。

注5) 11節から13節。「3大怪獣・地球最大の決戦(1964)」では12節。「モスラ(1961)」では13節。他は、全て11節。

注6)「ゴジラvsモスラ(1993)」では、殻の長径75m・短径45mに対し、出てきた幼虫は全長90m・体高20m。「モスラvsゴジラ(1964)」では1つの殻から2体出てきた。

注7) 歴代小美人は3組を数えるが、1番有名なのは初代小美人ザ・ピーナッツ。

注8) インファント島でモスラは、守護神としてあがめられている。小美人の歌声や島民の悲痛な叫びに含まれる波動が、モスラの休眠を覚醒させるのかもしれない。

《 参考文献 》

テレビマガジンデラックス22 GODZIRA (1981) . 講談社.

GODZIRA怪獣博物誌 (1993) . 講談社.

《おばた ひでのり 〒921 金沢市米泉10-39-2 年金宿舍104号》

ギフチヨウは花粉症と共にスギ花粉の飛散は例年二月下旬から始まり、五月上旬には終わりを告げる。毎年いやな思いをしているが、お気に入りのギフチヨウもこの間に発生する。花粉の飛散状況とギフチヨウの初見と重ねると、五、六割が飛散したところに初見が重なった。花粉症が猛威をふるっているころ、ギフチヨウが飛び出すことになる。

秘密兵器は小さい虫が苦手、能登のクロコムラを狙い、幼虫探しに臨んだ松井・高田の二氏ではあったが、町野川では一頭も採れなかった。そこで一週間後、二人は沖縄戦線で多大なる成果を上げた秘密兵器「ナカシゲ」を投入し、再度クロコムラを狙った。秘密兵器は、柳に向かうと大型天眼鏡を取り出したが、やがてフラフラしだし、スーパーアイテムはポケットの中へ。沖縄戦線で囁かれていたうわさは本当だった。

虫採りは新車に乗って生田・高田の金大チーム、授業をさぼってクロコムラ。車の中では、高田君がこれまでの成り行きから、十コ採ればVサイン等と話していたところが、ピカピカの新車で乗り付けると、柳という柳にクロコムラがベタベタ。新車で行くとも気分も高揚し、視界が開けるのだろうか。

標本箱の特殊な使い方
できあがった標本を虫や湿度、カビから守り、そのままの姿で保存するのが標本箱。ところが、「できあがる前に虫に食われる」と称し、箱の中で標本を作るおじさんがいる。誰とは言わないが、会長虫はみんなカビだらけですよ。

トリノフンダマシって何だ
トリノフンダマシはクモの仲間で、極めて珍しいツシマトリノフンダマシが金沢でも採れた。このクモ、テントウムシに似ていて、光沢のある

赤色に黒い円形斑点がある。クモ屋が一生に一度見ることでできるかできないかという代物だけに、徳本氏の喜び様が目に浮かぶ。

蝶屋以外は目を通さない？
蝶談会の会誌と言うと、蝶屋の会誌で蝶の記事が並んでいると思われる。いったん思い込むと、蝶屋以外の虫屋はほとんど目を通さない。地方の同好会誌ともなれば、なおさらだろう。また、どちらかと言うと蝶屋は一途で、他の虫には関心を示さない。となると、「翔」に蝶以外の記事が載っても、ほとんど読まれない事になる。これは、重大かつ深刻な問題である。

山本直樹氏、北海道に転居
徳島県を拠点に、各地のゴマやゲンゴロウを採りまくっていた山本直樹氏、北の虫も採るべく北海道へ引っ越した。札幌市豊平区豊平五条十の八フラット豊平三〇三号
☎011(821)1737

例会の記録

二月二日(木)八時から城南管工二階にて開催。一九八五年から十年続いた金曜例会が今回から木曜となった。せっかくの案内はがきに目もくれず、金曜に集まった会員もいたらしい。

今回のお話は、会長による「沖縄ゲンゴロウ採集記」で、年末から年始にかけて沖縄を駆け巡った、賑やかな採集行について聞かせてもらいました。中でも、期待以上の効果があった秘密兵器「ナカシゲ」の話には、やはりとも思っているが驚かされてしまった。この秘密兵器のおかげで、フチドリ以外は全て墮とし、コガタノ程度には見向きもしなくなり、ゲンゴロウ図鑑では、まだ2頭しか採れていない種も、それこそ山ほど採ってしまっただけ。

参加は井村、中西、松井、指田、徳本、高田、吉村、小路の八人。小路氏は特別参加の金大院生。

会員の動き・しゃげの動き

一月二十五日に新年宴会
都心にありながら落ち着い
た雰囲気が漂い、通を泣かせ
るイキな味。こんなコピ―が
良く似合う一九亭、酒好き十
一人が集まり、夜のふけるま
で虫談義。匂の味わいが、心
地良く花を添えてくれた。

今やイムエダが話題を独占

一年前はドークツゴミのイ
ムナダが世間を賑わしていた
が、今はイムエダが人気を独
占している。井村、江崎、高
田の三人組にかかれれば落ち
ない虫はなく、賑やかさに驚い
て落ちてくる虫も多々ある。

猿山の岸壁登って見る夢は
樹木分布図集によると、猿
山付近にシモツケがあり、ホ
シミスジがいるかもと、早速

調査に出かけた。門前の深見
から入ると、山中は雪でガチ
ガチだったがなんとかたど
りついた。灯台付近は標高二百
米、日本海が眼下にせまる岸
壁に登るとシモツケがたくさ
んあり、ベンケイソウの仲間
も見つかった。ホシミスジは
確認できなかったが、楽し
みがひとつ増えた。クロツバ
メもいるかも知れない。

完結間近と思っていたが

井村会長執筆なる「石川
のカミキリムシ科」が十年の
歳月をかけ昨年六月に一通り
のリストアップを終えた。し
かし、十年の間に色々な事
があり、リストは加筆修正が必
要になっていった。そこで後一
回、最後を締めくくって終わ
りたいと話していたが、それ
がなかなかはかどらない。

パワーアップグッズだった
最近、おじさん達の間では、
虫メガネが必須アイテムと化
している。以前は、二、三ミ
リの虫を覗いていたが、近頃
は二、三センチでも虫メガネ
が必要らしい。

採集地は昔のままなのに

久しぶりに採卵に出かけた。
医王山は昔のままで、往時の
ミズナラもそのままだった。
ワカンを脱いで、木に取り付
いたが登れない。おかしい、
こんなはずは無い。やっぱり
登れなかった。いつの間にか
おじさんになっていた。

虫の名前が出てこない

「あれ、あれ、あの虫、こ
の間の採集で、ひとつ逃がし
たけど、ひとつ採ったあれ」
「あくあれね。あのシマシマ
の」「そうそう、あの珍しい
ヤツ」。最近、こんな会話が
多くなった。良く知っている
虫なのに、名前がなかなか思
い出せない。

翔

NO. 113

1995年4月10日発行

百万石蝶談会

金沢市大場町東871-15 松井方

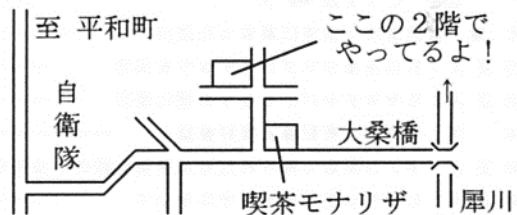
〒920-01 ☎0762-58-2727

郵便振替 00750-8-562

印刷 小西紙店印刷所

例会は偶数月・5月・7月の第1木曜8時から

TEL参加もOKです(0762-44-3318)



富沢 章・富沢直浩：樹液に集まった昆虫	1
松井正人：石川県産ツマグロキチョウを採集	3
松井正人：ミヤマチャバナセセリの蛹化場所	4
徳本 洋：地方的分布記録と同好会誌	5
松井正人：キノコ周辺で得られた石川県初記録の甲虫その4	8
松井正人：ヒグラシを捕まえたオニヤンマ	9
松井正人：ダイミョウセセリの越冬幼虫を採集	9
小幡英典：モ ス ラ 雑 感	10
編 集 部：会員の動き・しゃばの動き	12